

# 三浦綾子の自伝小説

上 出 恵 子

一

三浦綾子の自伝小説として、『三浦綾子全集』（主婦の友社）の「年譜・著作目録」には、次の四つのもものがあげられている。<sup>(注二)</sup>

\* 『道ありき』（一九六九年一月、主婦の友社。「主婦の友」一九六七年一月号〜六八年十二月号）

\* 『草のうた』（一九八六年十二月、角川書店。「月刊カドカワ」一九八五年五月号〜八六年四月号↑「女学生  
の友」一九六七年四月号〜六八年三月号）

\* 『この土の器をも―道ありき第二部結婚編―』（一九七〇年十二月、主婦の友社）↑『わが結婚の記』（「主婦  
の友」一九六九年九月号〜七十年十二月号）

\* 『石ころのうた』（一九七四年四月、角川書店。「短歌」一九七二年四月号〜七三年八月号）

『道ありき』を皮切りとするこれらの自伝小説といわれるものは、三浦の創作活動の中でも際立ったものとしてあるのは、周知の通りであろう。また、三浦の家を建てたクリスマスチャンの棟梁のことを描いた『岩に立つ』（一九七九年）を初めとし、小林多喜二をその母の視点で描いた『母』（一九九二年）に至る、三浦の評伝文学ともいべきもの

も、その変奏と見なすことができようが、三浦文学の特徴をなすこのような自伝小説とは、そもそもいかなるものなのか。また、三浦文学において、それはいかなる位置を占めるものなのか。

自伝というものの定義をめぐって、中川久定氏が「今まで知っている限り一番精密な定義」として紹介するフィリップ・ルジェンヌ『自伝契約』では、それは次のようなものとされている。(注二)

1 言語の形態

(a) 物語

(b) 散文

2 主題 一個人の生活、一人物の歴史

3 作者の状況 作者と話者とは同一人（作者の名前は実在の一人物に関連する）

4 話者の位置

(a) 話者と主要人物とは同一人

(b) 物語の回顧的展望

ルジェンヌは自伝の基本的な特徴として、その作品に作者・話者・主要人物の一致の確認、つまり自伝契約が存在していることが重要だとし、その上でこのような「精密な定義」をなしているのだが、この「精密な定義」の中で自伝小説は「3 作者の状況 作者と話者とは同一人（作者の名前は実在の一人物に関連する）」が欠如したもので、「虚構の小説として読むべきである」としている。

以上のようなルジェンヌの定義によれば、三浦の一連の作品は、正に作者・話者・主要人物の一致の確認がなされた典型的な自伝そのものなのだが、今あえて自伝小説とするのは、単に全集の「年譜・著作目録」に従ったとい

うことだけでなく、<sup>(注三)</sup>「これは、わたしの心の歴史であって、必ずしも、事実そのままではない。というより、書けない事実もあつたと言ったほうがいい。なぜなら四十代の私の自伝には、他の人にさしきわりのある場合が多いからである。人を傷つけるようなことは、極力避けるつもりである。そんなわけで何人かは仮名にした」(『道ありき』)ということも含めて、自伝も、いかに事実というものに忠実であつても、それは再構成された、いわば虚構だということ、さらには三浦のものはあくまでも「小説」であり、本質的に「文学」だということを明らかにしたいためである。

(注一) 村田和子編「年譜・著者目録」(『三浦綾子全集』第二十巻、主婦の友社、一九九三年二月)。かつては『道ありき第三部 仰入門編』として発表された『光あるうちに』(一九七一年十二月、主婦の友社。「主婦の友」一九七一年一月号〜十二月号)も、その発表形態からこれらの自伝小説に含められることもあつたが、自己の信仰についての考えを述べた『光あるうちに』は、やはりどちらかと言えばエッセーであつて、この著作目録でも随筆とされている通りのものである。

(注二) 中川久定『自伝の文学』岩波書店、一九七九年一月

(注三) 全集の「年譜・著作目録」においても、『この土の器をも』は自伝とされているなど、その名称については若干の揺れがある。

## 二

自伝小説をなぜ書くかについて、三浦自身は次のように述べている。

わたしは既に「道ありき」に青春時代の自伝を書き、「続道ありき」に結婚以後、「氷点」入選までのわたしたち夫婦の生活を書いた。それは、共に「愛と信仰の告白」をなさんがためであつた。(『石ころのうた』)

ここに明らかに見られるように、三浦にとってそれは「愛と信仰の告白」のためのものであった。「小説を書くことは信仰生活なのである」(「この頃思うこと」<sup>(注一)</sup>)と明言し、「文学を至上とするのではなく、神を至上とする以上、信者としての自分が日本に於て今しなければならぬことは、キリストを伝えることであると思つてゐる」(同)というように、「キリストを伝えること」を目的に、つまりは伝道を目的に創作活動を展開する三浦にとって、それは極めて自然なものであったとは、見やすい道理であろう。

「思索的の宗教ではなく、イエスの人格との個人的接触に出発した歴史的宗教である」<sup>(注二)</sup>キリスト教において、自らに生きて働く神をへあかしすることは、とりわけ重要なことだという。

／新訳に於て使徒達はイエスの生涯・死・復活の証人と呼ばれてゐる(ルカ伝二四四八、使徒行伝一八、二三二、三三五その他)。彼等がイエスの証人であるとの観念には、基督教が思索的の宗教ではなく、イエスの人格との個人的接触に出発した歴史的宗教であるとの事実を含んでゐる。勿論聖霊によつてイエスの人格の秘密を啓示されることにより、証の内容は一層深められ、確信が強められた。

これは主に使徒達についての言及ではあるが、「イエスの人格との個人的接触に出発した歴史的宗教である」キリスト教では、ひとりひとりが「証人」であり、自らに生きて働く神をへあかしすることが、その信仰の要となつていくのである。実際、三浦にとつて、短歌活動を離れて、まず最初のものが、「主婦の友」が募集した「婦人の書いた実話」入選作であり、『道ありき』の原型となる『太陽は再び没せず』(一九六一年)という実話であつたことも、このようにしてみれば、クリスチャンとしての三浦の必然であつたことがよく解るだろう。このようにクリスチャンとしてのへあかしに最もストレートに関わるものが、三浦の自伝小説というものであり、したがつてそこに三浦文学の特質が際立って現れてもくるのである。

以上のように、三浦にとって自伝小説とキリスト教との関わりはのっぴきならないものとしてあるのだが、ことは三浦のみならず、宗教というものの全般に関わって、自伝や自叙伝といわれるものには、ある重要な意味があるのである。たとえば、次のような中村恭子氏の指摘である。<sup>(注三)</sup>

著者も読者も、自叙伝を書く、または、読む作業によって、自己の、または、他者の過程としての人生を知るのである。自叙伝から読者が得るのは、一種の実践的知恵であるかもしれない。しかし、それは一人の人間の生きかたのうちに凝集された人格と信念の取り組みから生れた洞察が、読者の人生において試されるのである。それゆえ、自叙伝は読者がコミットする可能性を開いていると言えるだろう。自叙伝が宗教的伝承において重要な役割を果たすのはそのためである。

ここに述べられているように、自伝や自叙伝というものは、読者がコミットする開かれたものであり、いわゆる出会いの場を形成するものでもあって、「宗教的伝承において重要な役割を果たす」のである。わけてもキリスト教である。それは「へあかし」の重要性ということにおいて、いっそう重きをおかれることになるのである。こうして、三浦において、このような宗教における自伝の問題とまたさらに文学の問題が重なり、増幅しあって生まれたのが、その自伝小説なのだとと言えるのではなからうか。

(注一) 三浦綾子「この頃思うこと」(旭川市民文芸)十七号、一九七五年十一月)

(注二) 「アカシービト 証人 (Witness)」(『基督教百科事典』日曜世界社、一九三九年七月)

(注三) 中村恭子「宗教的自伝の語りと読み」(『宗教思想と言葉』現代の宗教学2、東京大学出版会、一九九二年七月)

## 三

三浦の、クリスチャン作家としての必然でもある自伝小説に、多くの読者は惹きつけられ、またさらにはキリスト教へと導かれてもいつているのだが、キリスト教の伝道というものが、その歴史はあっても、今ひとつはかばかしくない日本において、それは実に稀有なことだと言えるだろう。クリスチャンとして、「キリストを伝えること」に終始一貫してきた三浦の、熱い祈りがそれを可能とした、とその信仰にウェイトをおいて美しく語ることもできようが、それ以上に、ことは文学的な問題に関わってあるということを見過ごしてはならないであろう。たとえば、三浦の自伝小説の中心にあるのは、「『愛と信仰の告白』をなさんがためであった」と三浦自身も述べているように、それは愛と信仰をめぐる物語というべきものではなかったのか。

周知のように、三浦は敗戦によって強烈な挫折感に打ちのめされ、またその虚無感によって、七年間の天職ともいべき小学校の教師生活にピリオドを打ち、自暴自棄な生活のあげく、結核を発病、カリエスをも併発してギブスベットに寝たきりの日々をもつ十三年間にわたる闘病生活を余儀なくされるのだが、その間に幼なじみの前川正との再会と永久の別れ、そして三浦光世との出会いと求愛、その後病も癒えて結婚へ、という、正に「事実は小説よりも奇なり」を地でいく日々を、三浦は経てきているのであった。さらには、そこに前川に導かれたキリスト教とまた短歌創作という文学が関わって、三浦の人生はいやが上にもいつそう劇的なものとなっているのである。

このような三浦の歩みを、まず最初にまとめたものとして『太陽は再び没せず』があったとは、先にも述べたが、三浦の一連の自伝小説の先蹤をなすこの『太陽は再び没せず』について、「主婦の友」の編集者であった佐藤恵氏は、その入選のいきさつも含めて次のように語っている。(注一)

「主婦の友」は、昭和三十一年より毎年「婦人の書いた実話」を読者から募集し、その入選作は実話のもつ迫真性で、高い評判を呼んでいた。

やがて、これと募集の時期をずらして、別に実話のテーマをしぼり、「愛の記録」を募集することにした。第一回募集は昭和三十六年の六月だったが、これに先立つ一月に募集した「婦人の書いた実話」の中に、これぞ愛の記録というべき、極めつけの応募作品があった。絶望的な病床にありながら、信仰を共にすることによって深い愛に結ばれた体験記である。募集の種目は違っていたが、筆者の諒解を得て、これを「愛の記録」入選にふりかえ、翌年の「主婦の友」新年号に掲載した。林田律子作「太陽は再び没せず」である。

発表後、読者の反響はすばらしく、感動の便りや筆者との文通を求める手紙が殺到した。林田律子とは、一千万円懸賞小説にみごと入選、話題の作品『氷点』をもって一躍脚光をあびた三浦綾子さんの筆名であった。いささか長くはなったものの、三浦の自伝小説のいわゆる核心部分がどこにあるのかを、これは的確に示しているものだと思われるので、可能な限り引用してみたが、三浦の自伝小説とは、つまり佐藤氏の言葉を借りれば「絶望的な病床にありながら、信仰を共にすることによって深い愛に結ばれた体験記」であり、極めつけの「愛の記録」というべきものである。

この当時、つまり「昭和三十年代から四十年代にかけての出版界を手記ブームという猛烈な嵐が吹き荒れていた」と、三浦のデビュー作『氷点』と同年の昭和二十九年のベストセラー『愛と死を見つめて ある純愛の記録』に着目し、ユニークな視点で昭和三十年代の時代精神に迫っていかうとするのは藤井淑禎氏であるが、氏はそのような現象を「純文学」私小説の行き詰まりと中間小説・推理小説の台頭とが相関していることは周知の通りであり、これに加えて、手記ブームをも、純文学の衰退という同一の土壌から生まれたものと捉えてもいいかもしれないのであ

る」とその背景を分析し、「手記ブームが、『小説』というジャンルに対する、あるいは衰弱した『小説』をめぐる状況に対する異議申し立てであった」と指摘する。三浦のものもまた、このような「手記ブーム」の延長線上にあるのは否めぬ事実であろう。「手記の多くが、病いなり事故なり自殺なりで悲劇的結末を迎えている以上、そこには『小説』顔負けのおのずからなる物語性が構築されてしまう」と藤井氏もいうように、「『小説』顔負けのおのずからなる物語性」が三浦のものにもある。というよりも、より鮮烈なものとしてそれは厳然として在り、その故に手記ブームが去った今もなお、三浦のものは読み継がれ、読者を獲得しつづけているのだと言い得よう。

先述したように、三浦の自伝小説は「絶望的な病床にありながら、信仰を共にすることによって深い愛に結ばれた体験記」として読まれ、愛と信仰の物語が紡がれていくのだが、そのような物語が生まれる基盤には、徳富蘆花の『不如帰』以来の近代文学の伝統があつたのは、ほぼ間違いない。

(注一) 佐藤恵「思い出の『ひつじが丘』」(『月報』6 『三浦綾子作品集』3、朝日新聞社、一九八三年十月)

(注二) 藤井淑禎「純愛の精神誌―昭和三十年代の青春を読む―」新潮社、一九九四年六月

#### 四

三浦が結核であつたということは、紛れもない事実であるし、またそのような中で真実の愛に目覚め、愛を實現していったのもたしかな事実だが、しかしながら、それはまた、語弊をおそれずあえていえば、『不如帰』で決定的になつた結核という病をめぐる物語に響き合い、痛切な愛の物語を獲得し得たが故のものなのである。そして、さらに三浦の場合、そこにキリスト教が絡んで、柄谷行人がかつて『日本近代文学の起源』<sup>(注一)</sup>で明らかにしたような、



次のような光景をも呼び寄せていくものとなるのである。

たしかにコッホは結核菌を発見した。しかし、それが結核の原因だということはプロパガンダである。のみならず、ひとびとがこの学説をたやすく受け入れたのは、それが神学的なイデオロギーだったからだ。ちょうど明治二十年代に、この学説は普及した。『不如帰』に浸透しているのは、この学説のイデオロギー的側面である。そこでは、結核はあたかも原罪のように存在している。したがって、浪子はキリスト教に魅かれる。この小説は巧妙なプロパガンダであって、それは結核菌そのものにはないような感染力をもっている。

結核という病の意味とキリスト教との関わりをこのように述べた柄谷は、また「恋愛は自然であるどころか、宗教的な熱病である。キリスト教に直接触れなくても、『文学』を通してそれは浸透する。『恋』ではなく『愛』という奇妙な問題がひとをとらえる」とキリスト教と愛と、さらには文学との抜き差ししない関係についても言及するのだが、三浦の自伝小説の核には、柄谷がいうような日本近代文学の起源そのものを想起させるものがあるのである。すなわち、三浦においては、それは徹頭徹尾文学の問題であり、また同時にキリスト教の問題なのであった。したがって、三浦に深い絶望と虚無と、そして病をもたらしたあの敗戦という危機も、死と再生の物語として、語られることになるのである。

こうして、改めて三浦の自伝小説を見返せば、それはかつての自分が死んで生き返る物語でもあったことがよく解る。しかも、実際に結核という、当時はまだ死に至る病としてリアルなものであった病気も加味されて、よりいっそう具体的に切実な物語となっていることにも気づかれよう。そしてまた、そのように物語的操作が実に自然になされていることにも気づかされていくのである。たとえば、その自伝小説の最初のものである『道ありき』は、敗戦という、三浦にとってそれは死を意味する出来事から始められている、という具合なのである。そうして、こ

のように一度は死んだ三浦を甦らせるものとして、おもむろに示されるのがキリスト教なのである。それはイエスの死と復活によって成り立つものだからなのであるが、この時、つまり三浦の敗戦体験にイエスの死と復活の物語が重ねられる時、極めて個人的な体験がその個人のレベルを超えて、復活神話の更新ともいえるべきものとして、世界そのものの転換として重い意味をもってくるのである。ここに、戦前の天皇制イデオロギーをのり超え、新たな世界像を示し形象したものととして、戦後文学の一つの結実を見ることが可能なのである。<sup>(注三)</sup>三浦の自伝小説が、単なる自伝ではなく、あくまでも〈小説〉であり、また〈文学〉であるとは、以上のような意味においてなのである。しかしながら、一方において、三浦の自伝小説がいわゆる文学らしくないのも、またたしかであって、そこにこそ、三浦文学の肝心があるとは言を俟つまでもない。こうして、三浦独自の表現および文体というのが問題となってくるのであるが、それはまた稿をあらためて論じること<sup>(注四)</sup>にしたい。

(注一) 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社、一九八〇年八月

(注二) キリスト教と愛(恋愛)を短絡的に結びつけるのは早計だとの指摘(小谷野敦『男であることの困難』など)もあるし、後に柄谷自身も、その結びつきは偶発的な事情によったと述べている(柄谷行人・水村美苗「対談 恋愛・宗教・哲学の起源」が、偶然であるにしろ、明治期にキリスト教経由で、特にプロテスタントに関わって愛(恋愛)を知ったということは、なお、重要だと思われる。

(注三) 高野斗志美氏は早くから三浦文学の特異性を論じ、また多くの論評をもつが、氏もまた、戦後文学として三浦文学を位置づけている。

(注四) 繰り返し述べてきたように、三浦の場合「キリストを伝えること」を目的に「あかし」をなしていくのだが、この時大事になってくるのは、というより特徴的なのは、キリストを過不足なく伝え、また神の前に虚飾なく語るといふ、いわば禁欲主義ともいえるべき姿勢であり、そのようなものが事実のみ語るかのような表現および文体というものを引き寄せたと言えるのではないか。つまり、文学的な表現にはあまり用いられることのない「比喩のうちでもっとも比喩性の目立たぬ形式である」(佐藤信夫「レトリック感覚」という提喻中心の表現が、自伝小説のみならず、三浦の「キリストを伝えること」を目指したすべての創作に一貫してあるということのみ、ここでは指摘するにとどめる。

(一九九八・一・三一受理)